

〔玉露叢〕寛永十二年正月廿八日ニ、二ノ丸ニ於テ、將軍家光公へ仙臺ノ政宗、御膳ヲ上ラル、其時

ノ覺書、朝ハ御數寄屋ニテ、略中
染付皿
一 鮭 鮓ほそく切 御汁こいんぶ 水つかぶめ

〔吾吟我集〕戀六 寄皿戀

色ふかく人をば思ひそめつけのさらに忘れぬわがこゝろ哉

〔懷硯三〕氣色の森の倒び石塔

夫より臺所へ出て見るに、いつもの鮑具には乾飯の如くなりてあるをも、誰あつて心を付る者もなく、餘りの事に膳棚にかゝり、匂ひを尋る處に、少き青皿に、飛魚半を喰ひ止て在しを、手にて徐と搔出すを、此女走り來り、夕飯に添へんと思ふて置たるものをと、略下

〔槐記〕享保十二年極月十日、御茶、略中 皿赤繪、柿七ツ、 十三年二月十一日、御茶、略中 御皿ラキン

マテノイ 十四年二月廿六日、大徳寺龍光院へ渡御、略中 皿南京赤繪、ウコニヤ

〔槐記續編〕享保十六年二月廿三日、參候、略中 御皿金襴手、赤繪、

〔世間子息氣質〕取付世帯は表向を張つて居る太鼓形氣

亭主は道具に倍うつての直打書、此赤繪の皿、十枚銀貳百拾五匁、

〔扶桑名處名物集〕尾張 瀬戸 梅平

瀬戸竈に紅葉焚らん染付の色うるはしき錦出の皿。

〔狂歌東都花日千兩〕日本橋 綠樹園

買かしと引や綱手の皿の目にふた、びかゝる河岸の玄ら魚

〔棠大門屋敷三〕傾城生死の海

風流に釣たる棚々には、南京の摸樣皿廿枚、さんごじゆの猪口廿を添たり、